

【用語】鉢の木―能の一つ、最明寺（北条）時頼が諸国行脚の帰途、上野国で雪道に困った時、佐野源左衛門が愛蔵の鉢の木の木を焚いてもてなす。懸物―掛物、ここでは掛軸、掛幅。画仙紙―白色大判の書画用の紙。自由かぎ―自在鉤、いろりなどにつるし、鍋などをかける。讚―絵のかたわらに書く詩や歌、画賛。布袋・福祿―七福神の内の布袋と福祿寿。

【解説】この文書は、境町の蘭方医村上随憲すいけんが、江戸時代後期の南画家として著名な金井烏洲へあてた画幅等の制作依頼状である。屏風の完成を述べたあと、画仙紙・白紙・全唐紙には墨画の山水で、かつ掛軸にするので念入りになど、細かく注文を出している。村上随憲（寛政元〇慶応元年）は武蔵国久下村（埼玉県熊谷市）の生まれで、医学を志して一八歳のとき江戸の蘭方医のもとへ入門した。文政六年（一八二三）シーボルトが来日すると長崎へ行き、一年あまり蘭学を学んだのち、各地を周遊して文政十一年境町に居を定めて開業した。

一方、金井烏洲（寛政八〇安政四年）は佐位郡島村（佐波郡境町）の豪農金井家の次男で、父は画家の谷文晁や青木南湖らの文化人と交友をもち、また俳諧の名手という家庭環境で育った。二一歳で江戸に出て四年間、儒学・書画・詩文を学んで帰郷すると書画作詩に専念した。天保年間には「奥の梅関、関東の烏洲」と評されるほど画名をうたわれ、渡辺崋山や高野長英らの文化人の訪問をうけた。隣村に住む随憲はこれら人物と同様に烏洲との交流があつたのである。なお、烏洲の四子之恭は随憲が開設した私塾で学び、のちに内閣大書記などを歴任したことで知られる。